

令和 6 年 6 月 23 日現在

機関番号：64401

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(B））

研究期間：2018～2023

課題番号：18KK0019

研究課題名（和文）オセアニアの人類移住と島嶼間ネットワークに関わる考古学的研究

研究課題名（英文）Archaeological Study of human migrations and inter-islands networks in Oceania

研究代表者

小野 林太郎（Ono, Rintaro）

国立民族学博物館・学術資源研究開発センター・准教授

研究者番号：40462204

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,600,000円

研究成果の概要（和文）：新石器時代以降におけるオセアニアへの人類移住は、近年の研究成果により、まず東南アジア海域から西ミクロネシアやメラネシア方面にかけて行われたことが明らかとなった。近年、このうちメラネシア方面への移住に成功したアジア系新石器集団が、さらに東ミクロネシアへ最初に移住した可能性が指摘されつつある。そこで本研究では、その直接・具体的な移住やネットワークに関わる考古学的証拠の発見を目的とし、東ミクロネシアにおける人類移住の拠点と考えられてきたポンペイ島での初期居住遺跡の発掘を、現地の研究機関およびオセアニア考古学をリードしてきたアメリカなどの諸大学との国際共同研究として実施するものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、ポンペイ島の離島の一つであるレンゲル島に位置する先史遺跡での共同発掘を実施した結果、ポンペイ島を含む東ミクロネシアで最古級となる2000年前に遡る年代値が多数得られたほか、メラネシア原産の産地同定結果が得られた黒曜石の出土も確認することができた。これらの考古学的データにより、従来指摘されてきた初期の人類拡散が、メラネシア方面から東ミクロネシアへと行われた可能性を明らかに刷ることができた。また本研究が、現地や海外の研究機関との共同調査として実施できたことは、今後の日本におけるオセアニア研究の展開や、オセアニアにおける日本人による研究の役割という点でも重要な意義を持つであろう。

研究成果の概要（英文）：Recent archaeological studies revealed that the Neolithic human migration into Oceania initially occurred from the Maritime Southeast Asian region towards Western Micronesia and Melanesia. The current study also suggesting that Neolithic Asian groups that successfully migrated to Melanesia may have been the first people to move and settle further into Eastern Micronesia. This study aims to discover the direct and concrete archaeological evidence of these early migrations and networks. To achieve this, we plan to conduct some archaeological excavations of early settlement sites on the Pohnpei Island, where is considered as a key location for human migration into Eastern Micronesia. The project is carried out as an international collaborative research project with local research institutions and also with some leading universities in the United States and other countries in Oceania.

研究分野：海洋考古学

キーワード：人類拡散 東ミクロネシア オセアニア考古学 黒曜石 土器 貝製品 国際的共同調査 ポンペイ島

## 1. 研究開始当初の背景

先史時代におけるアジアからオセアニアへの人類移住は、大きく 2 つの時期が指摘されてきた。その最初は更新世期の旧石器時代で、新人 = ホモ・サピエンスによる当時のサフル大陸(現在のオーストラリア大陸とニューギニア島)とその離島域への移住がこれにあたる。近年、その移住時期は遅くとも 5 万年前頃に遡るとされ、移住を可能とした背景には前哨地となるウォーレシア海域での新人による海洋適応があったことが判ってきた(小野 2018)。

一方、二つ目の画期とされるのが、4000 年前頃から開始される新石器時代以降の人類拡散である(図 1)。その主体は、海域アジアを起源とし、農耕や家畜、物質文化的には土器の製作技術をもつ新人集団だったことが、明らかになりつつある。言語学の研究成果によれば、ニューギニアを除くオセアニアの全域で話されるオーストロネシア諸語が、この人類移住に伴い拡散した可能性が指摘されている。したがって、このアジア系新石器集団は、言語学的にはオーストロネシア語族の一派であったと考えられている。

このように移住の大まかな時期や、移住集団の言語や主な生業形態がセットで確認されている先史時代の人類移住に関する事例は稀であり、考古・人類学の分野では世界的にも注目されてきた。さらに近年、その移住拡散の最初の契機となった遠因として、3500 年前頃をピークとするアジア圏における気候の寒冷化と、それに伴う中国大陸の沿岸部を起源とする人類の移住・拡散も指摘されつつある。

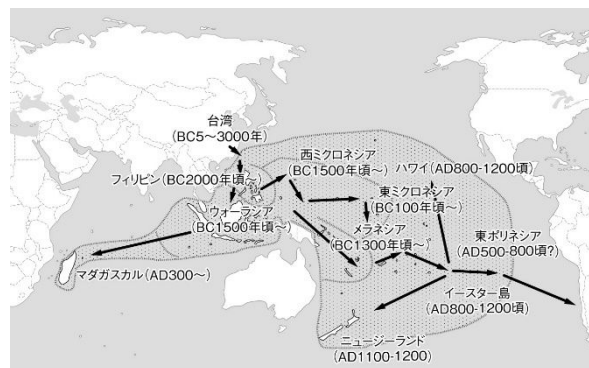


図 1 新石器時代後の人類拡散の時期・ルート

考古学的な痕跡に基づけば、オセアニアへ新たに移住した新石器集団は、土器やブタ・イヌ・ニワトリといった新たな技術や動物資源を携え、突如として 3300 年前頃にニューギニアの離島域に出現し、その後の数百年間にそれまで人類未踏の地であったメラネシア東部の島々から、西ポリネシアに位置するトンガやサモア諸島への移住と植民に成功した。この移住集団は、鋸歯印文に石灰が装飾される特徴的なラピタ式土器にちなみ、ラピタ人と呼ばれてきた。また彼らはポリネシアの島々への移住・拡散に最初に成功した人類として、ポリネシア人の祖先集団とも考えられている。

近年、メラネシアのヴァヌアツで出土したラピタ人骨の遺伝子分析でもその可能性が認められたが、同じくラピタ人を祖とする人々が、メラネシア方面から東ミクロネシアへと移住した可能性が、ミクロネシアにおける近年の考古学的研究、および言語学研究からも指摘されつつある。しかし、東ミクロネシアで移住初期まで遡る先史遺跡の発掘はまだかなり限られており、人類移住がメラネシアから行われたとする確実な考古学的証拠は得られていない。

## 2. 研究の目的

東ミクロネシアにおける人類移住の拠点と認識されてきたポンペイ島では近年、2000 年前以上に遡る先史遺跡が発見されたほか、メラネシア原産と推測される黒曜石や石斧が出土・確認されてきた(Nagaoka 2008; Nagaoka and Sheppard 2021)。そこで本研究では、国際

共同研究の連携を高めつつ、ポンペイ島を軸とした東ミクロネシアでの発掘をふくむ考古調査を実施し、メラネシアとミクロネシア間における初期の人類移住や島嶼間ネットワークの解明を目指す。

### 3. 研究の方法

本研究で発掘対象とするのは、ポンペイ島と周辺の離島に位置する先史遺跡群である。このうちレンゲル島遺跡は、ミクロネシア歴史保存局による試掘で多数の貝製品や動物遺存体に加え、初期移住期に遡る可能性のある土器群と黒曜石が出土した（図2）。そこで本プロジェクトでは、まずレンゲル島遺跡を対象として、ポンペイ島に所在するミクロネシア連邦歴史保全局（Historic Preservation Office）のほか、オセアニア考古学の分野で中心的な役割を担ってきた大学の研究者との共同研究という形で発掘調査を継続的に実施した。さらにメラネシアと東ミクロネシア間における人類の移住やネットワークに深く関わる先史遺跡の発掘に加え、従来の研究では各地域で個別にしか行われていなかった土器分析を、共通の視点や新たな分析手法も取り入れ、同時に行った。

これらは具体的には、ポンペイ島での発掘で出土した土器を対象とした（1）形態・様式に関わる比較分析や、（2）蛍光X線分析に基づく製作技術も視野にいれた比較分析である。同じく出土が予想された黒曜石についても、ニュージーランドのオークランド大学との共同調査という形で、蛍光X線による産地同定分析を計画・実施してきた。一方、出土した炭化物や貝製品の一部は炭素年代測定によりその年代値を明らかにするほか、貝製品は顕微鏡による使用痕分析や実測に基づく整理・分析を行った。

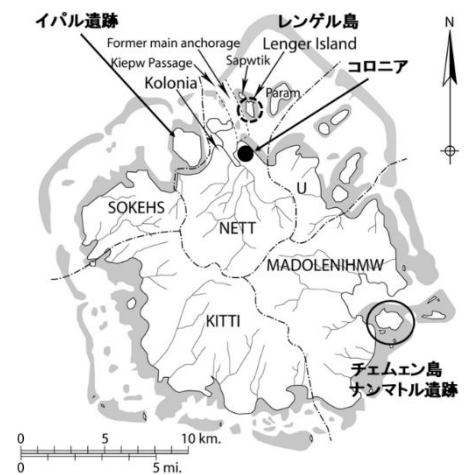


図2 レンゲル島の位置

### 4. 研究成果

レンゲル島での発掘調査は、第1次調査を2019年2~3月、第2次調査を2019年8~9月、その後のコロナによるパンデミックを経て、第3次調査を2023年2~3月、第4次調査を2023年8月に実施した。レンゲル島はこのポンペイ島北岸から約3.2 km北東の沖合に位置する（図2）。レンゲル島は南北約600m程度の小島だが、2007年には本プロジェクトの研究協力者である長岡がポンペイ州歴史保存局の依頼を受け、分布調査を実施した（Nagaoka 2008）。この調査により、先史時代遺跡の存在が推測される複数の遺物分布地が把握され、中でもCST土器片などが集中するA2-27と命名された遺跡で1x1mの試掘が行われた（図3）。CST土器片や黒曜石を含む遺物の集中は2層下部で確認され、長岡らによる調査では、この2層下部が先史時代の利用痕跡と解釈された。また出土した黒曜石の蛍光X線による産地同定の結果では、この黒曜石が1600キロ以上離れたメラネシアのアドミラルティ諸島産である可能性を示唆するものであった（Nagaoka 2008）。これに対し、本プロジェクトで新たに対象とした発掘区は、その北部に広がる空き地に1 x 1 m四方のグリッドを新たに設置した（図4）。

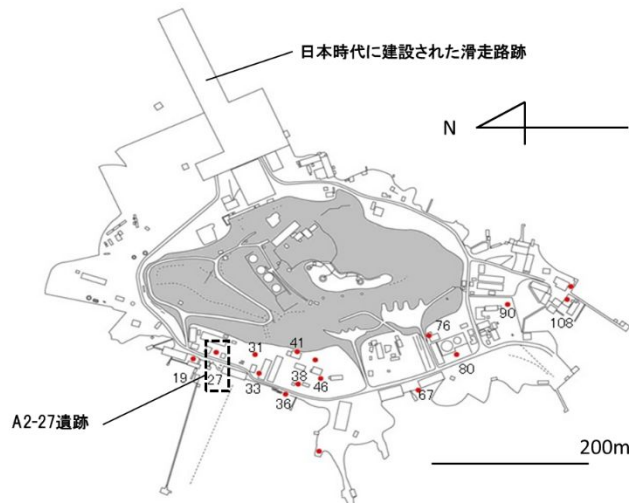


図3 レンゲル島と A2-27 遺跡を含む考古遺跡群の位置 (Nagaoka 2008 より改変)

このうち 2019 年 2~3 月にかけて実施した第 1 次調査では、A9,B9,C9,D9,E3 からなる東西に延びるトレンチ状のグリッドと、B9 の北側に位置する B10 のグリッドの計 6m<sup>2</sup> を対象とした。調査ではまずトレンチ状に 5 つのグリッドを発掘し、堆積状況や遺物の分布状況を確認した。その結果、もっとも遺物の集中がみられた B9 グリッドを拡張する形で B10 グリッドを発掘した。

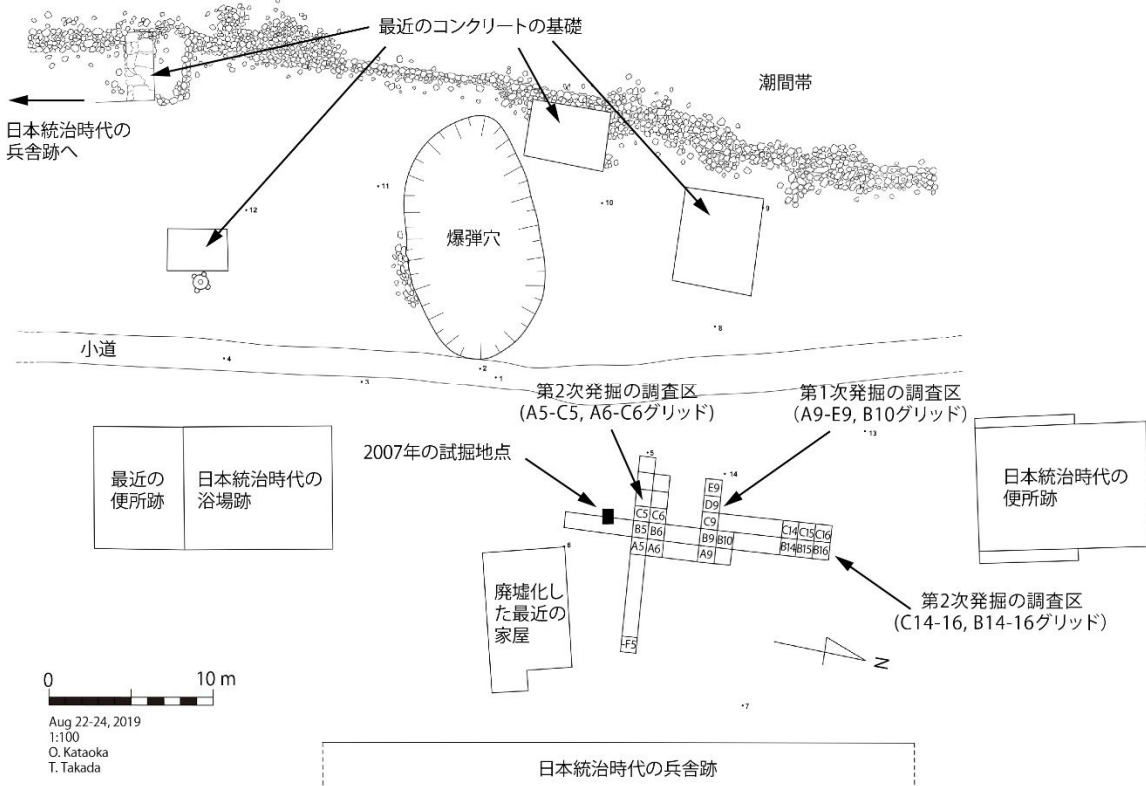


図4 A2-27 遺跡の発掘区と周辺環境

遺物の出土状況に関しては、全体的に最も出土量の多かった貝類遺存体は上層から下層まで一定量が出土しており、層位別の出土量に大きな差は認められなかった。その他の動物遺存体は、上層から多く出土する傾向があった。これに対し、貝製品や土器は中層から下層

にかけて多く出土した。特に CST 土器片は下層の白砂層より集中的に出土する傾向が認められた。こうした出土状況より、CST 土器片を伴う白砂層がレンゲル島における初期居住期の文化層である可能性が高い。また B9 や B10 では白砂層が出現した深度 90 cm 以深においては、海水の滲出が起こり、水を掻き出しつつ発掘しなければならなかった。

第 2 次発掘では、第 1 次調査で掘ったトレンチの北側および南側に新たにトレンチを開け、計 13m<sup>2</sup> を発掘し（図 4 参照）、第 1 次と同様に大きく 2 層の堆積層が確認され、下層となる白砂層より多くの CST 土器や貝製品が出土した。炭化物は上層から下層にかけて、ほぼすべてのスピットから出土した。一方、2007 年の試掘で出土した黒曜石片は、第 1 次の発掘では残念ながら出土が確認できなかったが、第 2 次の発掘では遺物の整理作業の段階で黒曜石の可能性のある石片が 1 点だが確認することができた他、チャートの可能性のある石片も出土しており、これらはいずれもレンゲル島やポンペイ島の外から持ち込まれた可能性が高い。また 2023 年に実施した第 3-4 次調査でも黒曜石片は出土しており、これらは現在、ニュージーランドにあるオークランド大学にて産地同定の分析中であるが、第 2 次調査で得られた黒曜石は、長岡による先行研究と同じく 1600 キロ以上離れたメラネシアのアドミラルティ諸島産であることが確認されている。

また本プロジェクトの発掘調査からは 4000 点を超える CST 土器片や大量の貝類遺存体、多様な貝製品と共に複数の初期居住年代値と推定される炭素年代値が、炭化物および貝類の両試料より得られた。また炭化物の較正年代値では 1929-1821 cal BP 年となり、IntCal など海洋リザーバーを考慮しない較正年代値では 2200 cal BP 年まで遡ることが確認された。

次に主な出土遺物のうち、食残滓と認識できる遺物の多くは貝類遺存体で、これらが遺跡周辺の沿岸やリーフ域で採捕可能な種であることが確認できた。その他の動物遺存体についてはさらなる分析が必要だが、現時点では魚骨を除き、初期居住期に廃棄されたと明確に認識できるその他の動物遺存体は出ていない。貝製品では、シャコガイ製の貝斧と貝輪の出土数が多く、また出土シャコガイ製腕輪の製作技法はメラネシアの民族例に多く認められ、その関係性が指摘できる。

A2-27 遺跡から出土した貝製品の内容をみると、多様な実用品と装飾品が確認できる上に、各製品の素材の選択性が高いことが伺える。さらに貝斧や貝輪には、一定の規格性を有することを示す製作技術的痕跡が確認でき、そのさらなる詳細な分析は当該時期、地域の貝製品の製作技術の復元に大きく寄与するものと期待できる。遺跡における貝製品組成は、ポンペイにおける初期入植者の起源に関しても重要なデータとなる可能性が高い。今後の更なる比較分析により、土器や石器も含めた組成全体での検討も加え、物質文化からも初期移住集団の起源や当時の島嶼間ネットワークの有無などについても研究を展開したい。

## 引用文献

- Nagaoka, T. 2008. Project Report for Archaeological Survey of Lenger Island (HPF Grant #64-05-20458 Special Project). Manuscript submitted to Division of Historic Preservation, Tourism and Parks Department of Land and Natural Resources Pohnpei State Government Federated States of Micronesia.
- Nagaoka, T. and Sheppard, P.J. 2021. New information from an old discovery: Geological analysis of a stone adze found on Pohnpei, Micronesia. *The Journal of Island and Coastal Archaeology*, DOI: 10.1080/15564894.2020.1862369
- 小野林太郎 2018. 『海の人類史 東南アジア・オセアニア海域の考古学』増補改訂版、雄山閣

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 16件 / うち国際共著 12件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 Katagiri Chiaki	4. 巻 -
2. 論文標題 Gaiso-Bo and Fuso Mortuary Practices and Human Migration in the Late Pleistocene in the Ryukyu Islands	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 The Prehistory of Human Migration - Human Expansion, Resource Use, and Mortuary Practice in Maritime Asia	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5772/intechopen.114232	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Boulanger, C.; Ingicco, T.; Semah, A.-M.; Hawkins, S.; Ono, R.; Reyes, M. C.; Pawlik, A	4. 巻 52
2. 論文標題 30,000 years of fishing in the Philippines: New ichthyoarchaeological investigations in Occidental Mindoro	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Archaeological Science: Reports	6. 最初と最後の頁 104222 ~ 104222
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jasrep.2023.104222	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ono, R.	4. 巻 47(1)
2. 論文標題 Material culture related to fishing and boats on the museum collections and fieldwork	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『国立民族学博物館研究報告』	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Oliveira, S. K. Nagele, S. Carlhoff, I. Pugach, T. Koesbardiati, A. Hubner, M. Meyer, A. A. Oktaviana, M. Takenaka, C. Katagiri, D. B. Murti, R. S. Putri, Mahirta, F. Petchey, T. Higham, C. F. W. Higham, S.O' Connor, S. Hawkins, R. Kinaston, P. Bellwood, R. Ono, A. Powell, J. Krause, C. Posth, M. Stoneking	4. 巻 6
2. 論文標題 Ancient genomes from the last three millennia support multiple human dispersals into Wallacea	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Nature Ecology and Evolution	6. 最初と最後の頁 1024-1034
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1038/s41559-022-01775-2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Nagaoka, T., P.J.Sheppard, C. Ross-Sheppard, N. Kononenko	4. 巻 131(4)
2. 論文標題 OBSIDIAN POINT DISCOVERED ON KAPINGAMARANGI ATOLL, MICRONESIA: IMPLICATIONS FOR POST-SETTLEMENT REGIONAL INTERACTIONS	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Polynesian Society	6. 最初と最後の頁 389-426
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 小野林太郎・山野ケン陽次郎・片岡修・Jason Barnabas・長岡拓也・片桐千亜紀・山極海嗣	4. 巻 41
2. 論文標題 東ミクロネシアにおける人類の移住年代と貝利用 ポーンベイ島での最近の発掘成果より	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『東南アジア考古学』	6. 最初と最後の頁 57-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 小田 静夫・小野林太郎	4. 巻 41
2. 論文標題 サビエンスによる更新世期の島嶼移住と渡海に関する一考察：ウォーレシア・琉球列島における事例から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『東南アジア考古学』	6. 最初と最後の頁 93-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ono, R, R. Fuentes, A. Noel, O. Sofian, Sriwigati, N. Aziz, and A. Pawlik	4. 巻 596
2. 論文標題 Development of bone and lithic technologies by anatomically modern humans during the late Pleistocene to Holocene in Sulawesi and Wallacea.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Quaternary International	6. 最初と最後の頁 124-143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.quaint.2020.12.045	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Fuentes,R, Rintaro Ono, Nasrullah Aziz, Sriwigati, Nico Alamsyah, Harry Octavianus Sofian, Tatiana Miranda, Faiz, Alfred Pawlik	4. 巻 37
2. 論文標題 Inferring human activities from the Late Pleistocene to Holocene in Topogaro 2, Central Sulawesi through use-wear analysis.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Archaeological Science: Reports	6. 最初と最後の頁 102905
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jasrep.2021.102905	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Ono, R, A. Pawlik, and R. Fuentes	4. 巻 -
2. 論文標題 Island Migration, Resource Use, and Lithic Technology by Anatomically Modern Humans in Wallacea	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Pleistocene Archaeology-Migration, Technology, and Adaptation	6. 最初と最後の頁 85-111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Ono Rintaro	4. 巻 106
2. 論文標題 Technological and Social Interactions between Hunter-gatherers and New Migrants in the Prehistoric (Neolithic) Islands of Southeast Asia and Oceania	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Hunter-gatherers in Asia: From Prehistory to the Present	6. 最初と最後の頁 125-146
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 小野林太郎	4. 巻 4
2. 論文標題 「環境変化からみた環太平洋圏におけるヒトの移住史 ウォーレシア・オセアニアの事例から」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『環太平洋文明研究』	6. 最初と最後の頁 76-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 Fuentes, R, R.Ono, N. Nakajima, J. Siswanto, N. Aziz, Sriwigati, S. Octavianus, T. Miranda, A. Pawlik	4. 巻 30
2. 論文標題 Stuck within notches: direct evidence of plant processing during the Last Glacial Maximum in North Sulawesi.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Archaeological Science: Report	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jasrep.2020.102207	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Fuentes, Riczar, Rintaro Ono, Naoki Nakajima, Hiroe Nishizawa, Joko Siswanto, Nasrullah Aziz, Sriwigati, Harry Octavianus Sofian, Tatiana Miranda, Alfred Pawlik	4. 巻 112
2. 論文標題 Technological and behavioural complexity in expedient industries: The importance of use-wear analysis for understanding flake assemblages	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Archaeological Science	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jas.2019.105031	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Ono, R. S. Hawkins, and S. Bedford	4. 巻 52
2. 論文標題 Lapita maritime adaptations and the development of fishing technology: A view from Vanuatu	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Debating Lapita: Chronology, Society and Subsistence, Terra Australis	6. 最初と最後の頁 415-438
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.22459/TA52.2019.20	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Ono, R, A. A. Oktaviana, M. Ririmasse, M. Takenaka, C. Katagiri, and M. Yoneda	4. 巻 92 (364)
2. 論文標題 Early Metal Age interactions in Island Southeast Asia and Oceania- jar burials from Aru Manara, northern Moluccas.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Antiquity	6. 最初と最後の頁 1023-1039
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15184/aqy.2018.113	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Ono, R, F. Aziz, A. A. Oktaviana, M. Ririmase, N. Iriyanto, I. B. Zesse, and K. Tanaka	4. 巻 35 (2)
2. 論文標題 Development of pottery making tradition and maritime networks during the Early Metal Ages in Northern Maluku Islands.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 AMERTA, Journal Penelitian dan Pengembangan Arkeologi	6. 最初と最後の頁 109-122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/15564894.2017.1395374	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

[学会発表] 計20件 (うち招待講演 6件 / うち国際学会 10件)

1. 発表者名 Ono Rintaro
2. 発表標題 Introduction of Maritime Asian and Pacific Study Program.
3. 学会等名 International Conference of the Max Weber Foundation: Transnational Research in a Multipolar World. (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Ono Rintaro
2. 発表標題 Austronesian inter-islands networks and marine resources use- Cases of Prehistoric Island Southeast Asia and Oceania.
3. 学会等名 JSSEAS & NIHU-MAPS Joint Symposium, Southeast Asia as Critical Crossroads: Dialogue with Anthony Reid (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Ono, R. C. Katagiri, C. Boulanger, K. Oohori, Y. Najima
2. 発表標題 Marine Resources Exploitation and Maritime Adaptation in the Southern Ryukyu during the Neolithic --- A Case from Shimotabaru Shell-Mound Site on Hateruma Island.
3. 学会等名 International Council Archaeo-Zoology (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Boulanger, C., R. Ono, and C. Katagiri
2. 発表標題 Early Marine Resources Exploitation in the Ryukyu Islands, from 37,000 to 200 BP: From a Regional to an Asian-Pacific Perspective.
3. 学会等名 International Council Archaeo-Zoology (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Ono Rintaro
2. 発表標題 Decades of Challenge for Reconstructing Prehistoric Fishing in Island Southeast Asia and Oceania.
3. 学会等名 International Workshop: Current Research and Future Directions in Indo-Pacific Ichthyoarchaeology, (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小野林太郎
2. 発表標題 "Canoes of Oceania" にみる朝枝利男の足跡 - ソロモン諸島のカヌー事例を中心に
3. 学会等名 国立民族学博物館共同研究「日本人による太平洋の民族誌的コレクション形成と活用に関する研究 国立民族学博物館所蔵 朝枝利男コレクションを中心に」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山極海嗣
2. 発表標題 島嶼地域の人類史研究における領域横断研究の可能性
3. 学会等名 FRIS/TI-FRIS Retreat 2023
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Ono, R. R. Fuentes, H. O. Sofian, N. Aziz, A. Pawlik, and C. Katagiri.
2. 発表標題 Early maritime migration and island adaptation by modern humans along the northern route in Wallacea: New evidence from Central Sulawesi, Indonesia.
3. 学会等名 World Archaeology Congress (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小野林太郎
2. 発表標題 「漁撈・狩猟活動からみたサピエンスによる島嶼適応 ウォーレシアの事例から」
3. 学会等名 生き物文化誌学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小野林太郎、片桐千亜紀、大堀 皓平、クララ・ブランジェ
2. 発表標題 「下田原貝塚と八重山諸島における先史漁撈の再検討」
3. 学会等名 動物考古学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Ono, R., Barnabas, J., Kataoka, O., Yamagiwa, K., Nagaoka, T., Fitzpatrick, S
2. 発表標題 When the early migrants reached to Pohnpei? - Human Migration, Interisland Networks, and Resource Use in Eastern Micronesia
3. 学会等名 Society for American Archaeology (SAA) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Rintaro Ono, Jason Lebehn, Osamu Kataoka, Kaishi Yamagiwa, Takuya Nagaoka, Scott M. Fitzpatrick
2. 発表標題 Human Migration, Interisland Networks, and Coastal Change in Eastern Micronesia: A Case Study of Lenger Island, Pohnpei, FMS.
3. 学会等名 The 9th International Lapita Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小野林太郎
2. 発表標題 「インドネシアの貝塚遺跡と完新世期における人類の貝利用」
3. 学会等名 『東南アジア考古学会大会』（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小野林太郎
2. 発表標題 「東南アジア～オセアニア海域にかけての新人の拡散と文化変化」
3. 学会等名 文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究：パレオアジア文化史学第7回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小野林太郎・R. フェンテス・A. ポーリク
2. 発表標題 「東南アジアの不定形剥片とその機能 使用痕分析から見えてきた人間行動と技術の複雑性」
3. 学会等名 文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究：パレオアジア文化史学第8回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ono, R., H.O. Sofian, A. A. Oktavianus Sriwigati, N. Aziz, C. Katagiri, and M. Takenaka
2. 発表標題 Early Metal Aged Dentate-stamped Potteries, Burial Ornaments, and Human Migration in Wallacea- Evidences from Sulawesi and Northern Maluku Islands, Indonesi
3. 学会等名 The 21st Congress on Indo-Pacific Prehistory Association, Hue, Vietnam (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ono, R.
2. 発表標題 Technological and social interaction between hunter-gatherers and new migrants in prehistoric (Neolithic) Island Southeast Asia and Oceania.
3. 学会等名 The 20th International Conference on Hunting and Gathering Societies (CHAGS) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小野林太郎
2. 発表標題 「地中に遺された海と島世界の人類史：オセアニア考古学の特徴と島研究への貢献」
3. 学会等名 『日本オセアニア学会創立 40 周年記念公開シンポジウム』、沖縄県立博物館・美術館講堂（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小野林太郎
2. 発表標題 「海民論からみた先史オーストロネシア語族の拡散：ラピタによる移住と生業戦略」
3. 学会等名 『第40回日本オセアニア学会大会』
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小野林太郎
2. 発表標題 「オセアニア考古学の半世紀 島々の発掘から海中への発掘へ」
3. 学会等名 篠遠喜彦先生追悼シンポジウム「楽園考古学をこえて」、東京海洋大学（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計11件

1. 著者名 小野林太郎	4. 発行年 2024年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 104
3. 書名 モノからみる海域アジアとオセアニア - 海辺の暮らしと精神文化	

1. 著者名 福井洞窟ミュージアム・東南アジア考古学会	4. 発行年 2023年
2. 出版社 雄山閣	5. 総ページ数 124
3. 書名 『東南アジアの洞窟遺跡』	

1. 著者名 木村淳・小野林太郎	4. 発行年 2022年
2. 出版社 グラフィック社	5. 総ページ数 255
3. 書名 『図説 世界の水中遺跡』	

1. 著者名 秋道智彌・角南篤編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 西日本出版社	5. 総ページ数 279
3. 書名 『commonsとしての海』	

1. 著者名 大西秀之編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 雄山閣	5. 総ページ数 382
3. 書名 『モノ・コト・コトバの人類史 - 後藤明先生退職記念論集 - 』	

1. 著者名 大塚 柳太郎	4. 発行年 2020年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 336
3. 書名 動く・集まる	

1. 著者名 風間計博、梅崎昌裕	4. 発行年 2020年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 304
3. 書名 オセアニアで学ぶ人類学	



1. 著者名 秋道智彌、印東道子、小野林太郎、後藤明、丸山清志、野嶋洋子、石村智、藍野裕之、須藤健一、内田正洋、片山一道、山極海嗣、菊澤律子、風間計博、林徹、大林純子、山口徹、飯田裕子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 雄山閣	5. 総ページ数 258
3. 書名 秋道智彌・印東道子（編）『ヒトはなぜ海を越えたのか オセアニア考古学の挑戦』	

1. 著者名 石森大知、丹羽典生	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 368
3. 書名 太平洋諸島の歴史を知るための60章	

1. 著者名 小野林太郎・長津一史・印東道子編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 400
3. 書名 『海民の移動誌 - 西太平洋のネットワークと海域文化』	

1. 著者名 木村淳・小野林太郎・丸山真史編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東海大学出版部	5. 総ページ数 153
3. 書名 『海洋考古学入門 - 方法と実践』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	米田 穰 (Yoneda Minoru) (30280712)	東京大学・総合研究博物館・教授  (12601)	
研究分担者	印東 道子 (Intoh Michiko) (40203418)	国立民族学博物館・その他部局等・名誉教授  (64401)	
研究分担者	片桐 千垂紀 (Katagiri Chiaki) (70804730)	九州大学・比較社会文化研究院・共同研究者  (17102)	
研究分担者	山極 海嗣 (Yamagiwa Kaishi) (80781202)	琉球大学・島嶼地域科学研究所・講師  (18001)	
研究分担者	片岡 修 (Kataoka Osamu) (90269811)	上智大学・アジア人材養成研究センター・客員教授  (32621)	
研究分担者	山野 ケン陽次郎 (Yamano Kenyojiro) (10711997)	熊本大学・埋蔵文化財調査センター・助教  (17401)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	長岡 拓也 (Nagaoka Takuya)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	バルナバス ジェイソン  (Barnabas Jason)		
研究協力者	シェパード ピーター  (Sheppard Peter)		
研究協力者	フィッツパトリック スコット  (Fitzpatrick Scott)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ミクロネシア	Historic Preservation Office			
米国	University of Oregon			
ニュージーランド	オークランド大学			